

Tue. Sep 7, 2021

Room 4

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

Exploring the relation between the SDGs and Sports

Chair: Tomoyasu Kondoh (Nippon Sport Science University),

Fumie Yamazaki (Niigata University of Health and Welfare)

3:15 PM - 5:15 PM Room 4 (Zoom)

[スポーツ文化-SA-1] The Shift

*Haruki Sawada¹ (1. Green Sports

Alliance Japan)

3:15 PM - 3:55 PM

[スポーツ文化-SA-2] The relationship between SDGs and

sports from the perspective of the

Olympics

*Yuji Ishizaka¹ (1. Nara Women's

University)

3:55 PM - 4:35 PM

[スポーツ文化-SA-3] The Roll of Adapted Physical

Activities and Education in SDGs

*Yukinori Sawae¹ (1. University of

Tsukuba)

4:35 PM - 5:15 PM

Room 5

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

A feasibility of the Social Mission in University

Physical Education, Sport and Health Sciences: the

present from the perspective of historical changes

Chair: Koji Takahashi (Nagasaki University), Kaori Kimura (Tokai

Gakuen University)

3:15 PM - 5:15 PM Room 5 (Zoom)

[学校保健体育-SA-1] Transition of university physical

education and its practical knowledge

accumulation due to the higher

education reform in Japan

*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of

Tsukuba)

3:15 PM - 3:55 PM

[学校保健体育-SA-2] Contents of university physical

education and Changes in teacher

training to teach these classes

*Mariko Kanaya¹ (1. University of

Tsukuba)

3:55 PM - 4:35 PM

[学校保健体育-SA-3] Management of physical education

classes and organization of teachers

at Nihon Fukushi University

*Shushi Takamura¹ (1. Nihon Fukushi

University)

4:35 PM - 5:15 PM

Room 6

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

The Significance and challenge in university as a

base for top athlete development

Chair: Hirokazu Arai (Hosei University), Riki Sukou (Japan

Women's College of Physical Education)

3:15 PM - 5:15 PM Room 6 (Zoom)

[競技スポーツ-SA-1] Perspective from the sport's

(physical education) university

*Eiko Yamada¹ (1. University of

Tsukuba)

3:15 PM - 3:45 PM

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from the non sport's

university department

*Yosuke Tahara¹ (1. Aoyama Gakuin

University)

3:45 PM - 4:15 PM

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from the top athlete

development for female students

*Tatsushi Kawamoto¹ (1. Daito Bunka

University)

4:15 PM - 4:45 PM

[競技スポーツ-SA-4] Perspective from UNIVAS

*Hironori Tanigama¹ (1. Toyo

University)

4:45 PM - 5:15 PM

Room 7

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

Can Inclusive Society and Lifelong Sports Coexist?

Sports paradigm change as the key for coexistence

Chair: Kyosuke Uchida (Tokai University)

3:15 PM - 5:15 PM Room 7 (Zoom)

[生涯スポーツ-SA-1] Body and Cohesive Society

*Koichi Kiku¹ (1. University of Tsukuba)

3:15 PM - 3:55 PM

[生涯スポーツ-SA-2] Role of sports club for inclusive

society

*Sampei Ohama¹ (1. Non-Profit
Organization Smile Club)

3:55 PM - 4:35 PM

[生涯スポーツ-SA-3] Towards the Construction of a safety
sports environment for children and
parents

*Etsuko Togo¹ (1. Tokyo Future
University)

4:35 PM - 5:15 PM

Room 8

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・
運動の在り方をいかに考えるか

Promotion of Health and Physical Fitness According
to Different Lifestyles: Lived Experiences of Women,
Health and Sport

Chair: Masayuki Takao (Tokai University), Tomohiro Kizuka
(University of Tsukuba)

3:15 PM - 5:15 PM Room 8 (Zoom)

[健康福祉-SA-1] Exercise and sport participation among
women

*Yasuko Kudo¹ (1. Daito Bunka University)

3:15 PM - 3:55 PM

[健康福祉-SA-2] Support for female athletes according to
their growth and lifestyle

*Kaori Yamaguchi¹ (1. University of Tsukuba)

3:55 PM - 4:35 PM

[健康福祉-SA-3] Thinking about women's health care
through sports

*Sayaka Nose¹ (1. The University of Tokyo
Department of Obstetrics and Gynecology)

4:35 PM - 5:15 PM

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

Exploring the relation between the SDGs and Sports

Chair: Tomoyasu Kondoh (Nippon Sport Science University), Fumie Yamazaki (Niigata University of Health and Welfare)

Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切にし、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

[スポーツ文化-SA-1] The Shift

*Haruki Sawada¹ (1. Green Sports Alliance Japan)

3:15 PM - 3:55 PM

[スポーツ文化-SA-2] The relationship between SDGs and sports from the perspective of the Olympics

*Yuji Ishizaka¹ (1. Nara Women's University)

3:55 PM - 4:35 PM

[スポーツ文化-SA-3] The Roll of Adapted Physical Activities and Education in SDGs

*Yukinori Sawae¹ (1. University of Tsukuba)

4:35 PM - 5:15 PM

3:15 PM - 3:55 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 4)

[スポーツ文化-SA-1] The Shift

Core Value and Key Design Principle

*Haruki Sawada¹ (1. Green Sports Alliance Japan)

<演者略歴>

2002年京都大学経済学部卒、三菱商事入社。台湾・ドイツ駐在を経て2017年同社退職後、露LUKOILに勤務。現在は、(一財)グリーンスポーツアライアンス代表理事、(一社)京都スマートシティ推進協議会理事兼事務局長を務める。本年4月より三重大学大学院生物資源学研究科(生物圏生命科学専攻)博士後期課程に進学。

2018年12月 COP24 で国連 UNFCCCより発表された「Sports for Climate Action Framework」は国連広報センターの日本語訳を参照すると、地球の気温上昇を 1.5°C に抑え、気候変動の最悪の影響を回避するためには、政府、民間セクターおよび市民社会のあらゆるレベルでより野心的で実効的な気候変動対策が今すぐ必要であるという認識は普遍的であると綴られている。18のスポーツ団体(内日本から8団体)で発足した同 Frameworkは2021年現在で200以上の団体に膨らんでいる。パリ協定と SDGs は、私たちの気候を安定化させ平和と豊かさを広げ、数十億人に機会を与える大きな潜在性を備えたビジョンに富む 2つの合意であると同 Frameworkは続ける。Ecologicalなもののみならず、Socioculturalな取組も含めて各国のスポーツ団体で SDGsに関連する様々な取組が行われているが、それぞれの取組の客観的評価は、例えば上記気候科学のそれとは種類の異なるものに見受けられるケースもある。本質は何か、そしてその客観的な可視化とはどうあるべきか考察する。なお、本発表では、前半に SDGsの概説を行い、後半では上記の点に触れていくこととする。

3:55 PM - 4:35 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 4)

[スポーツ文化-SA-2] The relationship between SDGs and sports from the perspective of the Olympics

*Yuji Ishizaka¹ (1. Nara Women's University)

<演者略歴>

奈良女子大学准教授。専門分野はスポーツ社会学。オリンピックをはじめとしたスポーツ・メガイイベントが地域・都市・国家に及ぼす影響について研究。著書に『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020』(人文書院)、共編著に『未完のオリンピック』(かもがわ出版)、『〈ニッポン〉のオリンピック』(青弓社)など。

17のゴールを持つ SDGs達成に向けた取り組みが多様な領域で開始されている。スポーツとの接点もさまざまに考えられるところだが、「開発と平和のためのスポーツ」(SDP)に関する領域を除けば、議論が進んでいるとは言いがたい。スポーツ界では未だ、SDGsを引き受けるべき自らの課題として認識していないのが現状ではないだろうか。本報告ではこのことの意味を考えるために、近年 SDGsの推進者としても位置づけられているオリ・パラ、特にオリンピックを題材にして考察を加えたい。IOCは自らの使命と役割について環境問題を柱の一つに据え、スポーツにおける持続可能性について議論してきた経緯を持つ。また、認知度は低いものの、東京大会では持続可能な大会の準備・運営に向けて5つの主要テーマが掲げられてきた。最終局面で別の意味の持続可能性が問われているオリンピックだが、開催準備を通して、ジェンダー平等や都市開発のあり方など、スポーツを通して見える社会に改善すべき点が多く含まれていることを明らかにしてきた。SDGsがなぜスポーツに必要なのかに加え、議論が進まないことにどのような問題がはらまれているのかについて考えたい。

4:35 PM - 5:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 4)

[スポーツ文化-SA-3] The Roll of Adapted Physical Activities and Education in SDGs

*Yukinori Sawae¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。筑波大学大学院修士課程体育学専攻修了後、横浜市北部地域療育センターで障害児の療育に携わっていた。その後東北大学大学院博士課程に編入学、修了。文京学院大学を経て、現職に至る。専門はアダプテッド体育・スポーツで、特に発達障害児の運動発達支援、インクルーシブ体育の実践に詳しい。

私が専門とするアダプテッド体育・スポーツ領域が、SDGsが掲げる目標に貢献できる可能性として、2つの面があると考えている。ひとつは、本研究領域はそもそも障害のある者に対して、運動やスポーツ、体育機会を保障すべき、アドボカシーとして機能を果たしてきた。そのため、本領域の研究・実践の充実を図ることは、SDGsの目標3（保健）や目標4（教育）に加え、目標8（成長・雇用）や目標10（不平等）、目標11（都市）の達成に寄与する可能性がある。加えて本研究領域は、障害のある者への体育・スポーツ指導からの帰納的枠組みとして、「その人に合わせて」スポーツや体育を変更し運動のもつ本来的な楽しさを享受できる方法論（Adaptationアダプテッド）を確立してきた。そしてアダプテッドは、対象を障害だけにとどめず、体育・スポーツ場面から排除されている人たちを包摂する手段として活用されるようになった。こうした実践・研究は、先にあげた目標のなかの対象を拡充することに貢献するだろう。しかしアダプテッドに関する我が国の体育・スポーツ実践には、いまだ多くの課題が残されている。その解決のためには、本研究領域にとじない複合的な視点からの議論が求められることになる。

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

A feasibility of the Social Mission in University Physical Education, Sport and Health Sciences: the present from the perspective of historical changes

Chair: Koji Takahashi (Nagasaki University), Kaori Kimura (Tokai Gakuen University)

Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

[学校保健体育-SA-1] Transition of university physical education and its practical knowledge accumulation due to the higher education reform in Japan

*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of Tsukuba)

3:15 PM - 3:55 PM

[学校保健体育-SA-2] Contents of university physical education and Changes in teacher training to teach these classes

*Mariko Kanaya¹ (1. University of Tsukuba)

3:55 PM - 4:35 PM

[学校保健体育-SA-3] Management of physical education classes and organization of teachers at Nihon Fukushi University

*Shushi Takamura¹ (1. Nihon Fukushi University)

4:35 PM - 5:15 PM

3:15 PM - 3:55 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 5)

[学校保健体育-SA-1] Transition of university physical education and its practical knowledge accumulation due to the higher education reform in Japan

*Atsushi Kiuchi¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育系教授。大阪工業大学准教授を経て2014年より現職。専門は大学体育論。筑波大学と鹿屋体育大学による3年制博士課程「大学体育スポーツ高度化共同専攻」に従事。（公社）全国大学体育連合常務理事／研究部長。「大学体育スポーツ学研究（旧大学体育学）」「大学教育学会誌」「スポーツパフォーマンス研究」編集委員。

大学体育は、わが国の高等教育改革の荒波の中でどのように変遷してきたのか。1991年の大学設置基準大綱化以降、多くの大学で体育の必修から選択への移行が進み、実技と講義からなる演習授業が増え、シラバス公開やFD授業アンケートの実施は常態化した。このように、大学体育が苦境に立たされたり、教員の負担が増えたことは事実だが、その一方で勝ち得た成果もある。その1つに、大学体育の実践に関する学術的知見の集積を挙げることができる。大学体育は何を学ぶ科目なのか、どのような体育授業がどのような点で高い学修効果を発揮するのか、などに関する「大学体育の授業研究」の蓄積である。これは、1990年代後半から米国高等教育界で広まった Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) の概念と一致する。SoTLとは、専門分野の研究と同様に、教育活動を論文として公表し他者からの批判的評価にさらすことで、教授・学習過程のレベルを向上させようという学術的探究をさす。高等教育に体育が堅固に位置づくためには、大学体育における SoTLの推進は必須であることを、最後に主張したい。

3:55 PM - 4:35 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 5)

[学校保健体育-SA-2] Contents of university physical education and Changes in teacher training to teach these classes

*Mariko Kanaya¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。鹿屋体育大学助手を経て2002年に筑波大学に着任。専門種目は体操競技。筑波大学に着任以降現在まで主に大学体育における実技授業を担当すると共に、2017~2019年度には博士課程（大学体育スポーツ高度化専攻）にも在籍し、自身の教育活動を学問的見地から分析することに継続的に取り組んでいる。

自身は大学体育で何を教えることができるのか、その目標を達成するためにはどのようなプログラムを構成すべきなのか、また受講生の学修効果をより高めるためにはどのような能力の向上に努めるべきなのか、さらにはそもそも大学体育の独自性とは何か…。これらは筆者がこれまで大学体育を担当する中で常に自問自答してきた問いである。

今回はこのような背景をもつ筆者が、自身が大学教員になるまでのプロセスや、大学体育で専門あるいは非専門のスポーツ種目を通して行ってきた教育活動、大学院において大学体育教員養成の一端に携わっている現状、さらには現職教員でありながら大学体育教員の養成課程で学んだ経験にもとづいて、大学体育の学修内容とその効果、そしてそれらを実現するための要因について検討した結果を発表する。この発表をきっかけに、体育の中核的な学修活動のひとつであるスポーツの運動学習に着目した場合の大学体育の学修内容とその効果がより広く理解され、それに関連して今後の大学体育教員の養成方法について議論を深めていければ幸いである。

4:35 PM - 5:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 5)

[学校保健体育-SA-3] Management of physical education classes and organization of teachers at Nihon Fukushi University

*Shushi Takamura¹ (1. Nihon Fukushi University)

<演者略歴>

日本福祉大学全学教育センター助教。専門はICTやキャンプを活用した学び。所属大学では全学部に跨る一般体育授業のコーディネートを担当。FD研修会等を開催し、非常勤、専任を問わず学びあえる組織づくりに取り組んでいる。また、高校教員時代の実践経験を活かし、初年次教育に資する体育授業の展開にも取り組んでいる。

日本福祉大学（以下、本学）では、大学設置基準の「大綱化」による必修から選択科目へ移行する状況を迎える以前から、大学体育の在り方について検討を行ってきた。目的は、大学で学ぶに値する体育の在り方の検討であり、体育科目を「必修」として存続するための学内理解を求めるための改革であった。検討の結果、大学体育の成果の到達点として「20歳の学力」を設定し、一般体育授業を運営している。

現在、多くの大学で体育授業を非常勤講師が担当する現状がある一方、非常勤講師の担い手は年々減少している。本学においても、初年次の一般体育授業の8割を大学での教育活動未経験者を含む、非常勤講師に委嘱している。「20歳の学力」の考え方に基づく質の高い学びを学生に提供するためには、専任、非常勤を問わず、体育授業の理念の理解をはじめ、授業実戦や問題点の共有、解決方法などをお互いに学び合い、研鑽を重ねる必要があった。本報告では、本学における「20歳の学力」を柱とした体育授業の運営と、コミュニケーションを深め、学びあえる教員の組織づくりのために開催しているFD研修会や懇親会等の取り組みについて報告を行う。

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

The Significance and challenge in university as a base for top athlete development

Chair: Hirokazu Arai (Hosei University), Riki Sukou (Japan Women's College of Physical Education)

Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

[競技スポーツ-SA-1] Perspective from the sport's (physical education) university

*Eiko Yamada¹ (1. University of Tsukuba)

3:15 PM - 3:45 PM

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from the non sport's university department

*Yosuke Tahara¹ (1. Aoyama Gakuin University)

3:45 PM - 4:15 PM

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from the top athlete development for female students

*Tatsushi Kawamoto¹ (1. Daito Bunka University)

4:15 PM - 4:45 PM

[競技スポーツ-SA-4] Perspective from UNIVAS

*Hironori Tanigama¹ (1. Toyo University)

4:45 PM - 5:15 PM

3:15 PM - 3:45 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 6)

[競技スポーツ-SA-1] Perspective from the sport's (physical education) university

*Eiko Yamada¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

元日本代表女子ハンドボール選手、元日本代表女子コーチ、元日本代表女子ジュニアコーチ。

現在、筑波大学女子ハンドボール部監督、国際ハンドボール連盟Handball @ School（学校体育におけるハンドボール）講師を務める。

筑波大学体育系は、「競技力向上に関する研究、その研究成果を生かした競技実践・指導実践、そして指導者養成が高度なレベルで三位一体となって機能する高度競技力強化拠点」として、わが国の競技力向上に寄与することを使命のひとつとして掲げている。研究、競技実践、指導実践をどのように循環させているのかを体育系と自身のチームそれぞれで紹介する。体育系では、学群、大学院（前期・後期）の教育プログラムと課外活動によって、学生アスリートおよび大学院生コーチが学びと実践の好循環を実現している。自身が監督を務める女子ハンドボール部では、学生の目標を最大限サポートするために様々な取り組みを行っている。ほかに、ハンドボール競技におけるヨーロッパの学生アスリートの現状など紹介した後、自身が考える学生トップアスリートを取り巻く課題を挙げていきたい。

3:45 PM - 4:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 6)

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from the non sport's university department

*Yosuke Tahara¹ (1. Aoyama Gakuin University)

<演者略歴>

青山学院大学 コミュニティ人間科学部 准教授 陸上競技部短距離ブロック コーチ。

日本オリンピック委員会強化スタッフ(マネジメント)。

日本陸上競技連盟 ダイヤモンドアスリート コーディネーター。

2012年に EUが、デュアルキャリアをはじめて提唱してから、日本でも「スポーツ振興計画」にて、デュアルキャリアの理解が進んできた。アスリートの多様な社会進出を支えるには、アスリートの大学進学においては、体育・スポーツ系大学(学部)以外の選択肢も用意する必要があるが、同時にアスリートを養成する環境が問題となってくる。体育・スポーツ系大学(学部)は、スポーツ科学の研究施設、そしてトレーニング施設など、競技力推進のための施設を有しており、人的資源、情報資源も含めて国際競技力向上のための環境が整えられているケースが多い。一方で、体育・スポーツ系大学以外の一般大学においては、そのような環境が整っている大学ばかりではなく、学内のスポーツ資源はもとより学外との連携も必要となってくる。

本報告では、一般大学がトップアスリートの養成についてどのような現状や課題を有しているのか、いくつかの大学を事例に考察したい。

4:15 PM - 4:45 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 6)

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from the top athlete development for female students

*Tatsushi Kawamoto¹ (1. Daito Bunka University)

<演者略歴>

慶應義塾大学環境情報学部卒（1996年）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（2001年）、大東文化大学スポーツ・健康科学部講師（2005年～）、教授（2016年～現在に至る）、（一財）全日本大学女子サッカー連盟理事長（2014年～現在に至る）。

2011年ドイツワールドカップの優勝によって一躍注目を浴びた女子サッカー。2021年9月には日本初のプロリーグであるWEリーグが開幕する。一方、女子サッカー部のある大学は全国でも90校程度であり、登録選手数も2,000名程度という現状にある。Jリーグ選手や日本代表選手を数多く輩出している男子と比べると足元にも及ばない。大学が女子サッカーの普及・発展に更なる貢献を果たすための方向性と方法について、皆さまとともに考えたい。

4:45 PM - 5:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 6)

[競技スポーツ-SA-4] Perspective from UNIVAS

*Hironori Tanigama¹ (1. Toyo University)

<演者略歴>

東洋大学 法学部 教授。

UNIVAS（一般社団法人 大学スポーツ協会）デュアルキャリア委員会 研修部会員。

歴史的にみて、日本の大学は「トップアスリート養成の拠点」としての機能を担ってきた。今日においても、大学在学中に国際舞台にチャレンジするアスリートは多く、大学で蓄えた競技力をもって卒業後に華々しく活躍する例も少なくない。

しかしながら、学生アスリートは、競技面のほかにも学業との両立やキャリア形成をはじめ、在学中に種々の問題に直面しているのが現状である。今後も、大学スポーツがトップアスリート養成の拠点たりえるには、解決すべき課題が山積しているといえよう。

2019年に発足した UNIVAS（大学スポーツ協会）は、大学スポーツを総合的に振興すべく誕生した競技横断的な組織である。UNIVASは、「卓越性を有する人材の育成」を理念の一つに掲げ、トップアスリートを含めたすべての学生アスリートを対象に、様々なサポート事業を展開している。

本報告では、大学がトップアスリート養成というテーマとどのように向き合っていくべきなのか、大学スポーツを俯瞰的に捉える UNIVASの視点から考察したい。

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

Can Inclusive Society and Lifelong Sports Coexist? Sports paradigm change as the key for coexistence

Chair: Kyosuke Uchida (Tokai University)

Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどういうものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-1] Body and Cohesive Society

*Koichi Kiku¹ (1. University of Tsukuba)

3:15 PM - 3:55 PM

[生涯スポーツ-SA-2] Role of sports club for inclusive society

*Sampei Ohama¹ (1. Non-Profit Organization Smile Club)

3:55 PM - 4:35 PM

[生涯スポーツ-SA-3] Towards the Construction of a safety sports environment for children and parents

*Etsuko Togo¹ (1. Tokyo Future University)

4:35 PM - 5:15 PM

3:15 PM - 3:55 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 7)

[生涯スポーツ-SA-1] Body and Cohesive Society

Towards paradigm change of a sport

*Koichi Kiku¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

1957年富山県生まれ。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。体育社会学、スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学を経て、現在、筑波大学体育系教授。教育学博士（筑波大学）。日本体育・スポーツ・健康学会副会長、日本スポーツ社会学会会長、文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

近代スポーツは、それまでのスポーツと異なり、明らかに自由な身体を「あえて」不自由（＝障害者）にするルール（拘束）を設けることで、身体の楽しさを安全な状態で長引かせる享受の仕方として発明された。それが特権階級（レジャークラス）から労働者階級まで、等しく享受されるべきであるとするのが「みんなのスポーツ」である。これに対して、生涯スポーツは、その身体の不自由さの許容範囲をライフステージに応じて自由に改変し、スポーツの自己目的的な楽しさ享受自体が、全生涯にわたる自己開発享受につながる自発的な学習を導くとする概念である。そこでは、結果を求めているながら、その過程自体を重視するパラダイムが生まれる。共生社会とは、誰しもが、どのような年齢や環境においてもそのような学習が保障されることを認め合い、QOLを実現する楽しさを共に享受する社会であるとすれば、生涯スポーツにおけるスポーツの概念自体がそれを内包していると考えることができよう。したがって、ここでの議論は、現代スポーツが、なぜ競争の結果のみを社会的に重要視し、本来の共生社会を実現する社交的パラダイムを見失うことになったのかを明らかにすることである。

3:55 PM - 4:35 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 7)

[生涯スポーツ-SA-2] Role of sports club for inclusive society

*Sampei Ohama¹ (1. Non-Profit Organization Smile Club)

<演者略歴>

筑波大学大学院修士（スポーツ学）、NPO法人スマイルクラブ理事、バレーボール国際公認コーチ。

スマイルクラブはもともと体育教師であった理事長大浜あつ子が、自閉症児の母親から「学校の体育授業についていけないので、自分の子どもを見てくれませんか？」との依頼から2000年にNPO（兼 文科省の総合型地域スポーツクラブ）としてスタートし、主に発達障がい者（児含む）を対象に運動やスポーツによる社会的自立を目的として運動教室「運動が苦手な子の教室（以下 「苦手教室」）」（学校体育館等で実施）をおこなってきた。またバレーボールを大学まで実践してきたこともあり、一般のバレーボール種目を中心としたスポーツ教室もスタートし、元オリンピック選手もコーチとして教室指導に携わっていただいている。現在は、バレーボールのほかに、バスケットボールやバドミントン種目も追加し、教室も開催している。

2016年から新たに放課後等デイサービス事業（障がい者の個別運動指導に特化した事業）もスタートし、現在約400人（苦手教室約200人、放課後等デイサービス事業約200人 計400人）の障がい者が在籍し、毎日スポーツや運動を楽しんでいる。

このような、障がいのあるなしに関わらず、多様なスポーツを楽しめる環境づくりを進めるには何が必要となるのかを議論していきたい。

4:35 PM - 5:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 7)

[生涯スポーツ-SA-3] Towards the Construction of a safety sports environment for children and parents

*Etsuko Togo¹ (1. Tokyo Future University)

<演者略歴>

福岡県出身。筑波大学教育研究科修了、東京学芸大学大学院単位修得満期退学。筑波大学にて博士号を取得。公認心理師、臨床心理士、臨床発達心理士。現在、東京未来大学こども心理学部教授。新宿区社会教育委員、足立区区民評価委員会副会長、足立区文化・読書・スポーツ推進委員会副会長（運動・スポーツ部会会長）。日本中学校体育連盟の研修、民間スポーツ団体でのペアレント教室や心理サポートなどを担当してきた。

生涯スポーツの入り口となるジュニア期のスポーツの受け皿としては、地域スポーツの役割が大きい。地域スポーツは、一般的に入会制限などはなく、特別な配慮が必要な子ども達も多く参加している。地域スポーツへの参加は、親の支えになしには成り立たず、練習や試合会場への送迎、当番、応援など様々な場面で親は子どものスポーツに関わっていく。そのため地域スポーツの場では、指導者と子どもとの関係のみでなく、親と子どもの関係、応援席の親集団と子どもとの関係、親同士の関係、子ども同士の関係など多層的な人間関係が交差する。そこには多様なニーズや価値観も存在することとなる。本来であれば、多様なニーズに対応できるスポーツ環境を整える必要があるが、勝利至上主義に傾くことで、技術力が低い子どもや配慮が必要な子がスケープゴートになりやすい。

3人の子どもの親として地域スポーツに関わってきた経験や、臨床心理士としての相談活動を通して、スポーツの魅力を実感するとともに課題とも直面してきた。演者らが行ってきた研究結果や実践をもとに、親も子も安心できるスポーツ環境を構築するためには何が必要であるのかを議論していきたい。

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

Promotion of Health and Physical Fitness According to Different Lifestyles: Lived Experiences of Women, Health and Sport

Chair: Masayuki Takao (Tokai University), Tomohiro Kizuka (University of Tsukuba)

Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

[健康福祉-SA-1] Exercise and sport participation among women

*Yasuko Kudo¹ (1. Daito Bunka University)

3:15 PM - 3:55 PM

[健康福祉-SA-2] Support for female athletes according to their growth and lifestyle

*Kaori Yamaguchi¹ (1. University of Tsukuba)

3:55 PM - 4:35 PM

[健康福祉-SA-3] Thinking about women's health care through sports

*Sayaka Nose¹ (1. The University of Tokyo Department of Obstetrics and Gynecology)

4:35 PM - 5:15 PM

3:15 PM - 3:55 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 8)

[健康福祉-SA-1] Exercise and sport participation among women

Perspective from social science

*Yasuko Kudo¹ (1. Daito Bunka University)

<演者略歴>

鹿屋体育大学大学院修了。2017年より現職。1991年4月から2017年3月まで笹川スポーツ財団に在席し、前項調査「スポーツライフ・データ」等に携わる。専門分野はスポーツ社会学。日本スポーツとジェンダー学会理事、一般社団法人 スポーツ・コンプライアンス教育振興機構理事、日本スポーツクラブ協会評議員等を現任。

改めて、8年前の2013年第64回大会（立命館大学）の過去大会から、本部企画や組織委員会企画、各専門領域のシンポジウムやキーノートレクチャーなどのタイトルを見返してみたところ、テーマに「女性」というキーワードが含まれていたのは、7年前の2014年第65回大会（岩手大学）、体育史専門領域のキーノートレクチャー「日本における女子体育教師史研究」の1題のみであった。しかしながら、現状の健康・スポーツ政策においては「女性の健康」や「スポーツを通じた女性の活躍促進」が課題とされている。

私からは、社会科学の立場から、成人女性の運動・スポーツ実施率の50年間の推移や、女兒・女子の運動・スポーツ実施の現状も併せて紹介したい。また、健康の主観的評価や健康状態に関するデータも踏まえて、今後の展望など、問題提起を行いたい。

3:55 PM - 4:35 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 8)

[健康福祉-SA-2] Support for female athletes according to their growth and lifestyle

*Kaori Yamaguchi¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

元女子柔道選手。世界女子柔道選手権（1984）で日本女子として初めて優勝。ソウル五輪(1988)では銅メダルを獲得。現役引退後は、指導者としてシドニー五輪(2000)、アテネ五輪(2004)のコーチを務めた。現在は、筑波大学で教鞭をとるかたわら、女性アスリート支援にも努めている。

スポーツ界では長年に渡り、女性アスリートの育成強化は、男子とは違う発育発達や生理的な機能等に特化して行われてはこなかった。また、競技を継続しながら女性特有のライフイベントである妊娠・出産を迎えることも希少であった。指導者の多くが男性であることから、競技を行う上での女性特有の問題を意識せずに指導が行われたり、アスリートも相談しづらい環境でもあった。日本における女性アスリートの競技力は年々向上しているが、男性に比べて競技を行う環境やサポート体制には依然として課題が残る。女兒や一般女性のスポーツ実施率も低いことも問題視されている。女性アスリートへの支援から女性全体がスポーツを生涯にわたって親しむための環境、サポートについて考えたい。

4:35 PM - 5:15 PM (Tue. Sep 7, 2021 3:15 PM - 5:15 PM Room 8)

[健康福祉-SA-3] Thinking about women's health care through sports

*Sayaka Nose¹ (1. The University of Tokyo Department of Obstetrics and Gynecology)

<演者略歴>

2003年北里大学医学部卒業、2006年東京大学産婦人科学教室入局後、関連病院で研修、2012年～2017年国立スポーツ科学センターメディカルセンター勤務、2017年～東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科勤務となり

同年女性アスリート外来開設、国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンター婦人科非常勤。

スポーツは思春期から性成熟期、さらに更年期、高齢期の女性のヘルスケアにおいて身体機能の維持、増進に大きく貢献する。また、骨粗鬆症や糖尿病、妊娠高血圧症候群等の疾病に対し、予防医学の観点からも医療や社会の生産性に大きな役割を担うと考えられる。しかし、日常の臨床において、適切な医学的知識の不足によりスポーツに参加する女性の健康がかえって害されているケースも少なくない。当科では、2017年4月より女性アスリート外来を開設しているが、受診する選手のもっとも多い主訴は、利用可能エネルギー不足による無月経である。若年アスリートにおいて無月経や低体重、摂食障害、骨粗鬆症と診断され、生涯にわたり治療が必要となるケースもみられる。これらの課題解決に向けて、10代からの継続したヘルスケア教育とスクリーニング体制の構築、医療機関への受診環境整備が課題である。

本講演では、スポーツが女性のヘルスケアにどのように貢献できるかをライフステージ毎に考えるとともに、過度なスポーツによる健康問題の現状について紹介する。